

大地にさぐる人類史

門脇誠二 かどわき せいじ / 名古屋大学博物館

考古学者にとってフィールドとは、
現存する遺跡と歴史記述のあいだのギャップを埋める
手がかりをさぐる現場だといえます。

考古学とフィールドワーク

考古学では、過去の人々が残した
様々な人工物や食物を研究し、当時の
生活や社会を論じることが一般的
に行われています。文字記録ではなく、
過去の生活の物的痕跡を一次的
な研究標本として獲得するのが考古
学のフィールドワークになります。

ただし、「過去の社会は直接発掘され
ない」という指摘があります。つ

まり、発見された遺跡は現在残され
ている痕跡にほかならず、過去の人
間活動や社会を直接反映するとは限
らない、という意味です。このように、
過去の資料としての遺跡の限界を考
慮すると、考古学者が記述する歴史
は、現在残る物質から類推すること
によって導かれた過去の出来事に対
する仮説といえます。この仮説は一
回性の歴史的出来事に関するので、

追認実験によって確認することが事
実上不可能です。

このような考古学研究的限界を考
慮すると、「いかに信頼性の高い考古
学的証拠を提出できるか」という課
題が重要になります。例えば、科学
哲学者のアリソン・ワイリー (Alison
Wylie) 氏は、その1つの方法とし
て「複数種類の証拠」を提出するこ
とを提案しています。複数の異なる
種類の証拠のあいだで仮説のクロス
チェックをすることができるからで
す。同様の意見が考古学者の藤本強
氏によっても述べられています。こ
の見解に従えば、過去の記述の信頼
性を高めるためには、フィールドに
おいてなるべく多くの記録を獲得す
ることが重要だと考えられます。

ただし、事実上はフィールドワー
クに費やすことのできる時間や人員、
予算などに制約があります。また、
目の前に残されている遺跡の性格や
保存状態も考慮する必要があります。
研究現場の状況に対応しながら、そ
れに見合う適切な研究課題を設定し、
調査の規模や精度を調節することが
必要だと思われます。次に、私の専
門の西アジア地域における考古学の
フィールドワークについてご紹介しま
す。

ユーフラテス川中流域の遺跡踏査

考古学のフィールドワークといえ
ば発掘、とは限りません。遺跡の存
在や空間分布を確認するのも大切な

調査で、「遺跡踏査」あるいは「遺跡
分布調査」と呼ばれています。例え
ば私は、シリア国内を流れるユーフ
ラテス川の中流域において遺跡踏査
を行っています(図1)。この地域の
年間降水量は200mm以下で、ユー
フラテス川の河川低地では灌漑によ
ってムギ栽培が行われていますが、
比高数十mの河岸段丘の上は地肌が
露出した乾燥ステップです(図2)。
ワジ(澗谷)や緩やかな丘陵のふも
とを、わずかな下草を食むヒツジの
群れが通り過ぎていきます。一見何
もないような単調な風景ですが、地
面に開けられた無数の穴が突然あら
われる場所があります。古代墓の盗
掘孔です(図3)。商品にならない人
骨が悲しく残された傍に、土器の破
片が散っています。私たちはこの土
器片をわずかな手掛かりに、古代墓
の年代推定を行います。盗掘で破壊
された古代墓から得られる情報は限
られると思われるかもしれませんが、
その分布を記録してみると、河川低
地に墓が密集していることが分か
ります(図2)。この当時、集落の近
郊に墓地をつくった集団が数km間
隔で居住していた地域社会の様子を
うかがい知ることができます。集
落遺跡の調査だけでは得られな
かった考古学的証拠です。

遺跡踏査の方法にも色々ありま
すが、私たちの方法は景観踏査
(landscape survey) と呼ばれる種

図1 本文で紹介される考古学フィールドワークの位置。

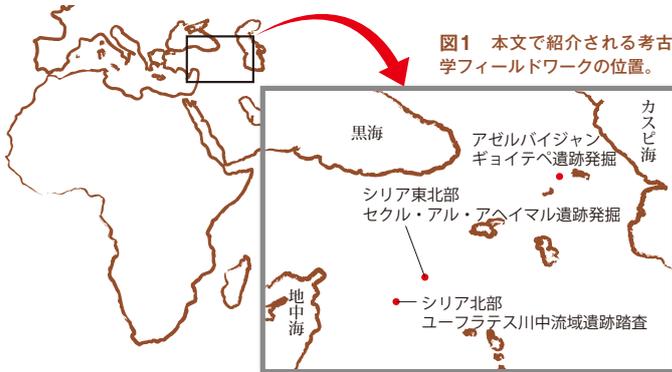


図2 シリア北部、ユーフラテス川中流域における遺跡踏査の範囲。右上がユーフラテス川。河川低地は緑の耕作地に覆われているのに対し、河岸段丘上は乾燥ステップである。河川低地の黄色3点が青銅器時代の集落遺跡を示す。その南部の河岸段丘上に同時代の墓地(緑色)が集中する様子がみられる。線は踏査経路を示す。衛星画像はGoogle Earthより。

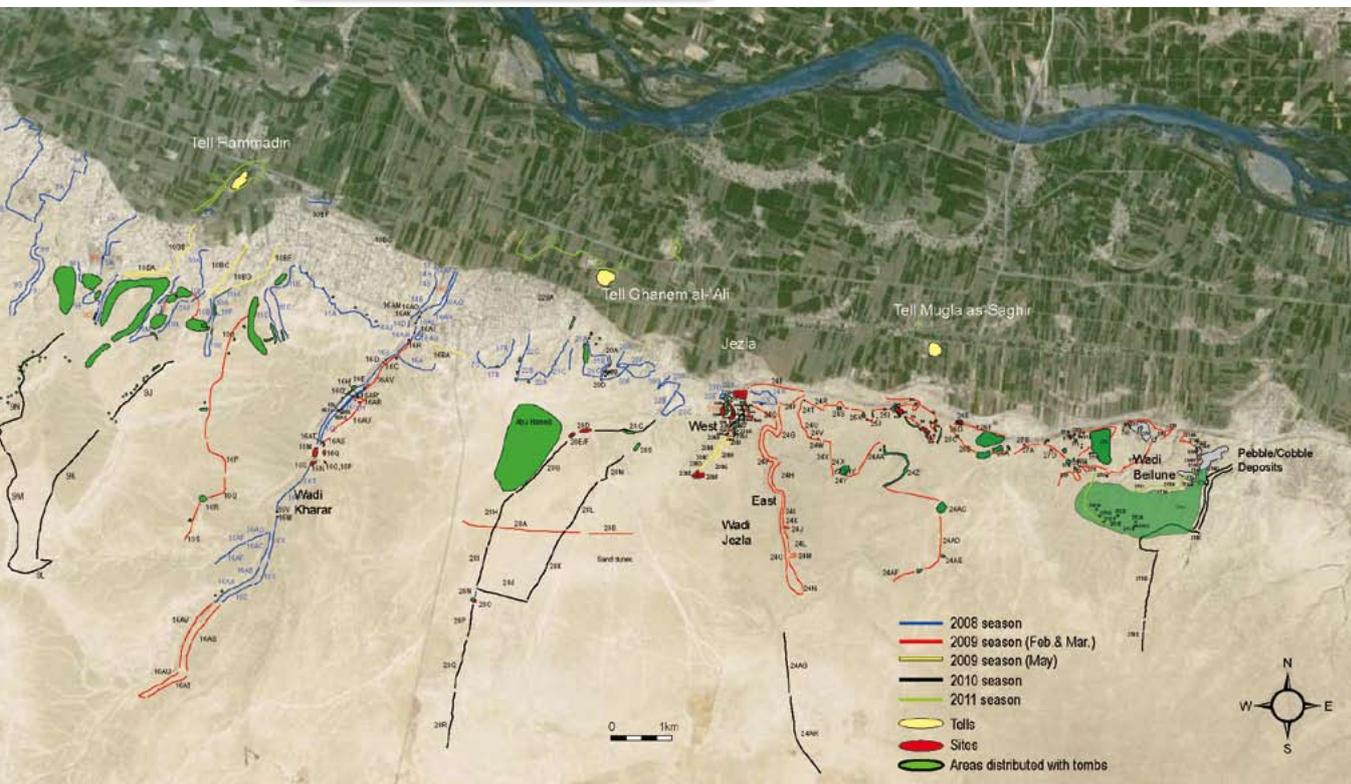


図3 地面に開いた無数の穴。盗掘された古代墓である。周辺には青銅器時代の土器のかけらが散らばる。ユーフラテス川中流域の遺跡踏査。



図4 ユーフラテス川に注ぐ支流（手前）の段丘。遺跡などないように一見見えるが、中央尾根の左右の隅2か所で後期旧石器時代（約3～2万年前）の石器が集中して散布していた。ユーフラテス川中流域の遺跡踏査。



図5 西アジアに典型的な遺丘（テル）の発掘風景。アゼルバイジャン共和国、ギョイテベ遺跡。円形の泥壁住居が同じ場所に繰り返し建設された結果、地層が累積した。

類になります。集落遺跡だけを対象とするのではなく、小規模な遺跡も調べます。人間の生活や社会を深く理解するためには、集落だけではなくそれを取り巻く環境や土地に関する情報も必要です。現在のユーフラテス川流域でも、集落の周りには畑が広がり、ヒツジの群れが草を食み、墓が設けられています。私たちの調査では、旧石器時代の狩猟採集民や青銅器時代の牧畜民が一時的に滞在したキャンプ址あるいは石器素材を採集した場所を発見しました（図4）。これらの活動の痕跡として残される遺跡は小型で不明瞭ですが、一定の地域における人間活動の広がりを知ることができます。そして、その活動領域が異なる集落のあいだで近接している場合には、集団間の社会交流に関する情報を得る手がかりともなります。つまり、より一般的な集落遺跡の発掘から得られる情報を

補完する意義があると考えています。

現在は、衛星や飛行機から撮影した地表の映像や様々な観測データを用いた遺跡探索も数多く行われています。私たちも、こうしたリモートセンシング技術の一部を利用して、あらかじめ踏査範囲を観察し、遺跡がありそうな場所に見当をつけます。その後、徒歩によって地面を観察し、地表に散布する遺物やわずかな地形変化を見つけます。また、踏査経路を詳細に記録することによって、調査結果を客観的に査定できるようにしています（図2）。

発掘——遺跡の解剖とサンプリング

遺跡踏査で地面から拾われる遺物と異なり、発掘品からはより多くの情報を得ることができます。例えば、発掘品を研究する場合、それが出土した地層や場所（例えば住居の床あるいはゴミ捨て場）に関する情報

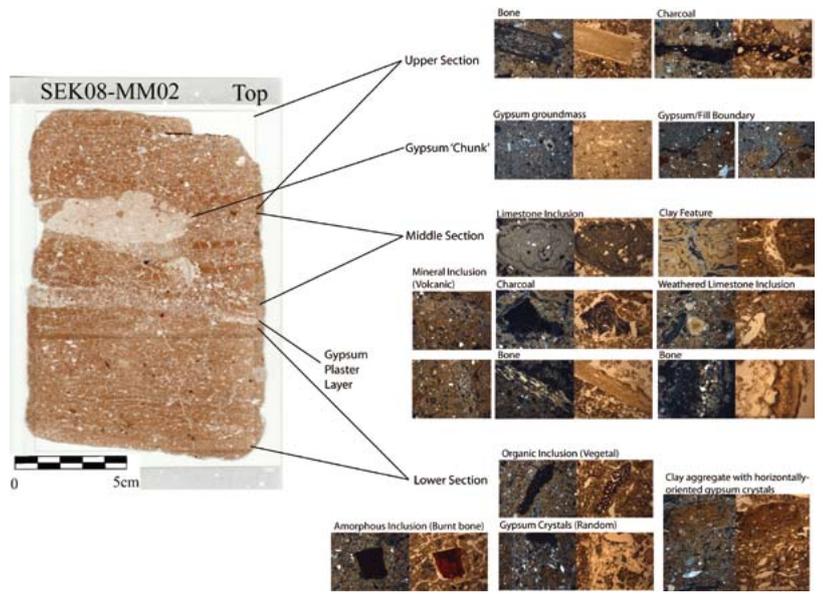


図6 住居の石膏床とその上下の堆積を合わせて採集した土壌ブロックの薄片（左）とその顕微鏡観察の結果（右、ケンブリッジ大学Lisa Maher氏による）。骨や炭化物、粘土塊、石膏などの微細な破片が、おそらく水の作用を受けて水平に堆積した。シリア東北部、セルク・アル・アヘイマル遺跡。

や、一緒に出土した遺物の種類やサイズから、発掘品の相対的年代や人間活動との関わりを推定することができます。したがって、発掘では通常、遺物が出土したコンテキストを記録します。そのためには、遺跡を構成する異なる種類の堆積物を区別し、それを順序よく取り除くことが必要です。発掘作業は解剖に例えられることがあります。つまり、遺跡にメスを入れる目的は、その内容物を得ること以外に、遺跡の構造を理解することにもあるといえます。

例えば、西アジアの場合、丘の形をした遺跡（アラビア語でテル）が存在します。泥壁住居から構成される集落が、同じ場所で繰り返し建設されることによって、遺丘として残されたわけです（図5）。このテル型遺跡を発掘する場合、建築物を基準として層位を設定します。この建築レベルを単位として遺物や食物残渣の比較を行うことによって、物質文化の通時変化や生業活動の変遷を調べることができます。また、放射性炭素の測定による年代値を得れば、建築レベルに基づく相対編年に時間的尺度を加えることができます。こうした層位的発掘は、西アジアだけでなく日本を含む全世界に共通する方法です。

このように、発掘とは遺物を見つけるために土を取り除くだけの作業ではありません。遺物が埋もれている状況やコンテキストを手掛かりに、過去の生活や社会の変遷に関する証

拠を獲得する捜査現場になります。例えば、通常は取り除かれるだけの対象である土を捨てずにサンプリングし、その中に含まれている微細な遺物や骨片、植物片などを見つけるほか、それらがどのように堆積しているかを顕微鏡で観察する研究を行っています（図6）。それによって、遺跡内の堆積がどのような人間活動あるいは自然作用によって形成されたかを知ることができます。これらの新たな記録を調べることによって、過去の人間活動を示す複数種類の証拠を得ることを目的としています。

さいごに

他の研究分野も同じだと思われるかもしれませんが、フィールドは考古学研究の一次資料を獲得する現場になります。現場には未開拓の情報が数多く残されていますから、新たな理論や視点で臨むことによってこれまでに得られなかった標本を採取することができます。調査現場の状況に応じながら、1つでも多くの種類の記録を獲得することによって、少しでも蓋然性の高い人類史を描くことをこれからも目指します。

謝辞

紹介した調査は、東京大学総合研究博物館の西秋良宏教授を代表として行われています。本文執筆と写真使用の許可を頂きましたことに感謝申し上げます。